

令和6年度第1回三重県総合教育会議
いじめ対策について

2024(令和6)年11月29日

三重県勤労者福祉会館

天笠 茂(千葉大学名誉教授)

いじめられる側

○いじめにあった児童生徒の心

- ・親や周囲の人々に心配させたくない。
- ・困ったことや悩みを、隠して耐える。
- ・ストレスを抱え込み、耐え切れなくなる。

○「困った、助けて」と言える雰囲気と、「困った」をしっかり受け止めることができる体制を学校の中に築くことが求められます。(『生徒指導提要』)

⇒児童生徒が相談しやすい環境づくりを進める必要がある。

いじめる側

- いじめは悪いことと認識している。
- 自分の行っている行為は、いじめではないと正当化する。
- 他者へ責任を転嫁するなど自己中心的な理由づけを行う。
- 「無自覚ないじめ」ということについて。

いじめられる側⇔学級・ホームルーム担任⇔いじめる側

○学級・ホームルーム担任が、いじめられる側を「絶対に守る」という意思を示す。

○学級・ホームルーム全体にいじめを許容しない雰囲気浸透させる。

○学級・ホームルーム担任が信頼される存在として児童生徒の前に立つ。

「加害児童生徒に対しても、保護者に協力を依頼し、自己の行為の意味を認識させた上で、成長支援につながる丁寧な指導を行うことが求められます。」(『生徒指導提要』)

学級・ホームルーム

○日本のいじめの多くが同じ学級・ホームルームの児童生徒の間で発生。

- ・いじめる側⇔いじめられる側
- ・周辺で暗黙の了解を与える「傍観者」
- ・「観衆」としてはやし立てたり面白がったりする存在。

○固定され閉鎖的な特性をもつ学級集団において、ストレスなどがたまると、いじめなどに発散される可能性が高まってくる。

○いじめが発生する学級では、守りに入り、授業や活動に参加する意欲も低下すると考えられる。

○学級集団の状態によって、いじめられる子も異なる。

学級・ホームルームについて

□日本の学校教育は、学級・ホームルームというシステムを通して、知・徳・体をトータルに教育できる大きなメリットをもつ。

■しかし、逆の方向に展開すると、学習指導も生徒指導も相乗的に悪化していくシステムでもある。

体験活動によっていじめを防ぐ

⇒子ども達に学級に、めざす目標を。

□体験活動で取り組むことを通して、子ども達を組織し、かかわらせながら、学級という集団形成を図っていく営みの大切さ。

□みんなで取り組む体験を通して、その意味やがんばりを認め合い、学級集団のまとまりを培う。

■しかし、多くの学校行事が削減されている。

■学校行事の削減は、学級集団育成の時間と場面を大きく減少させる。

⇒学級集団育成の時間と場面を何らかの形で保障する必要。

ベテランから若手への継承：校内研修をめぐって
—学習指導と生徒指導—

□生徒指導の三機能（四機能）を生かした授業

- ・自己存在感の促進
- ・共感的理解
- ・自己決定
- ・安全・安心な居場所づくりへの配慮

□学級経営・ホームルーム経営

チーム学校によって子どもを育てる

教職員が子どもたちと向き合うことのできる体制の整備

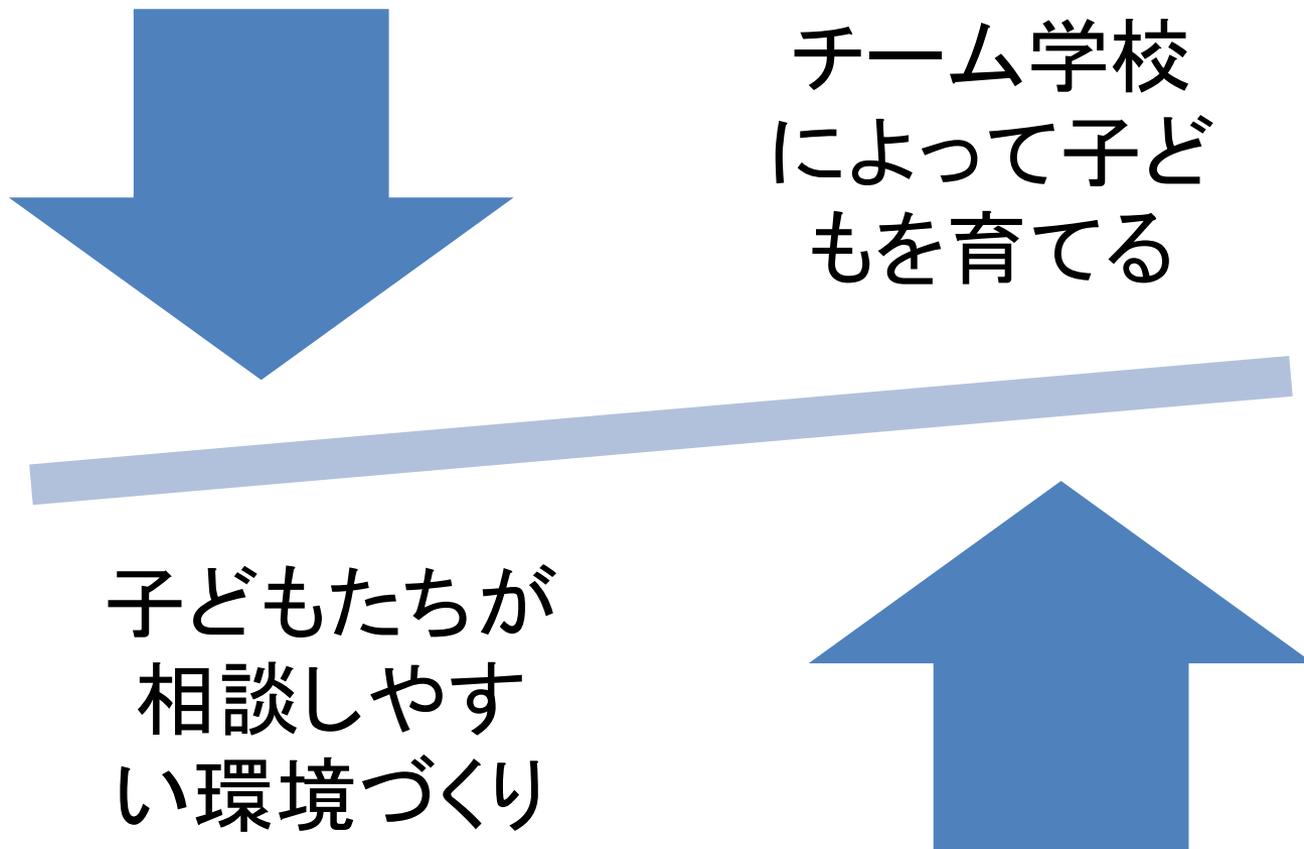
○チーム学校による生徒指導

- ・校務の改善に資する取組の促進
- ・外部人材の活用の促進
- ・同僚間で振り返りがなされる組織風土
- ・管理職を中心にミドルが機能するネットワークづくり
- ・学校・家庭・地域の信頼醸成

ーコミュニティ・スクールと学校評価ー

○学級・ホームルーム担任、養護教諭を支援する

学級・ホームルーム担任、養護教諭を 支援する



参考文献

- ・河村茂雄『日本の学級集団と学級経営』 図書文化 2010年5月
- ・天笠 茂「チーム学校時代の生徒指導と学校経営」 森田洋司・山下一夫監修/佐古秀一編著『チーム学校時代の生徒指導』学事出版 2020年11月
- ・文部科学省『生徒指導提要』 2022年12月
- ・高橋知己「いじめから児童生徒を守る生徒指導」『教育展望』2024年9月号